



エンドレス



Canan

旅に出る。君に捧げる戯曲は存在しないからとウルトラマリンのファンファーレ。踵と地面がこんにちは、こんにちは。狂った拍子で鐘を突く。ぼんぼりはともらない、暗闇だけがしばしのおともだち。しかばねさんちよいと失礼とご挨拶。飼い猫に首輪はつけたかい。この愛らしい恐怖心ならとっくの昔に相棒さ。ご挨拶だね。おやあんなところに賢そうなボルゾイたち。彼らはもともと高尚なの。あなたのお供にはもったいないわ。懐中時計を仕込んだ胸元からころりとロケットが転がりだした。古びたポートレートが主張する。そうだ、古びた革靴を忘れずに。雨の日も晴れの日も、この一歩は狂わないのだ。テンの毛皮を羽織ったつもりでひらり。かざりけのまるでないグラシン紙がキッシュを飾る。こんもりとスピナッチ。厚切りのベーコンがじゅわり、まるまる太ったマッシュルーム！パラフィンに抱かれたショコラは静かに眠らせて。燻したままの鈍いグレイ。最後の晚餐に燃え盛るスープを。紙吹雪がどこからともなく吹かれて花びらまみれ、季節は真冬の様相だというのに。眼下にそびえる偉大な大輪よ、君に幸あれ。喉奥からこぼれる咆哮はたったひとりのための夜想曲。雑然と背を向ける。孤独な冒険には粗野がお似合いだ。アングラなのね。夢があるだろ。でも翼はないわ、飛べないままよ。問題ない、アングラだからさ。泣いているのかいとひとり。泣くな泣くな泣くな泣くな泣くな泣くな泣くな泣くな。仔猫ちゃんが振り向きざまにたりと気味悪く笑った。飼いならしたつमोरりの恐れがあつという間に遠ざかっていく。ぎゃおん。盛りのついた成猫だ。今さら勇敢に立ち向かえるものか。馴染んだ靴で見知らぬ土地をひと駆け、ふた駆け、昼夜を問わず駆け抜ける！鳥になった気分だ。気つけにウイスキーをひとつあおった。いいや、これは蜂蜜酒、なんてたって黄金の輝き。ホップとは比べ物にならないさ。慄きを背中に隠してようやく風が小麦を揺らす。いつしか寂びれたステーションが佇む町にいた。いや、ステーションが町だった。どうしてこんなことには大きな声では言えないが、ため息が木漏れ日の密やかさでそつと、そつと。物語と同じままの車両がずっと動かない。呼吸しない彼は生きてなどいない。そう、玩具なのだ。乗りますかと鷹揚に首肯を拒否した。陳腐だね、生き方すべてが。表情だけが言っている。生意気な。汽車は夢を見ている、行き先未定のブラックボックス。野立て看板に矢印。この先ノーチャージノーチャレンジノーリスク。ダイヤル式の伝言板。あけびのはじけたのが、いいねえと時代錯誤の襲来。メロウ。規則正しい碁石並べ。墓場か。座り込んだら立ち上がることができなくなった。ここで終わりかい、情けないね。どこぞの貴族らしく緩慢に堂々と背筋を伸ばした。往生するならいざ行かん、孤高の人らしく！カメレオンにはなれない、ならないといきまく姿が滑稽だとは知らぬまま、カメレオンになる。ダウト。空っぽのまま渦に落ちた！なんて抗いがたい魅力なんだ、恐怖を物ともしない、そして、早い！恥もなく眠った。目が覚めたら、いつものベッドとサイドテーブルがそこにあった。ウイスキーは子どもの飲み物じゃありませんよ。